

# わの会の眼Ⅱ

心を射抜く作品たち



NPO 法人あーと・わの会 書籍プロジェクト

# 目次

堀 進二《老婆の肖像》	70	相田直彦《磐梯山の景》	108
川上邦世《春風駘蕩》	72	清水良雄《一本松夕景》	110
植木 茂《合》	74	浦久保義信《水郷》	112
桂 ゆき《身辺雑記》	76	小島善太郎《新緑の道》	114
北川民次《仲間の画家たち》	78	オノサト・トシノブ《サークル69―E》	116
岩崎勝平《ひじつく》	80	恩地孝四郎《失題》 <small>(室生犀星著『青い猿』の挿絵より)</small>	118
伊原宇三郎《ロシア貴族ガロチェンコ夫人》	82	恩地孝四郎《壺》	120
萩谷 巖《マダムX》	84	恩地孝四郎《リックNo.9 はるかな希い》	122
木下孝則《婦人像》	86	谷中安規《画想》	124
宮本恒平《婦人像》	88	松村綾子《紫陽花》	126
甲斐莊楠音《太夫道中図》	90	万羽 章《1950年夏の女(仮題)》	128
菅 楯彦《高士観梅図》	92	篠原新三《収穫(仮題)》	130
荒井陸男《M氏の肖像》	94	長谷川潔《花》	132
龍 駿介《海内第一の山》	96	山口長男《富士山麓》	134
松山忠三《お城の花屋》	98	安藤義茂《白いリボンの少女》	136
三迫星洲《北京の角楼》	100	津高和一《公園風景》	138
古嶋松之助《雪の日本橋》	102	山下新太郎《セーヌ河》	140
栗原忠二《大運河の夕暮れ》	104	萩谷 巖《巴里セーヌ川》	142
ヴァインセンシオ・山崎《城壁のある町》	106	鈴木信太郎《オランダ万才》	144

『わの会の眼II』刊行に寄せて	土方 明司	田中寅三《海の風景》	36
はじめに	野原 宏	小柴錦侍《(二) パルタージユ》	38
編集長挨拶	平園 賢一	作者不詳(K・Nサイン)《海景》	40
〈作家・作品〉		水木伸一《ベニス風景》	42
岡村政子《木靴を履いた西洋婦人》	12	前田寛治《婦人像》	44
浅井 忠《さくら》	14	国吉康雄《四つの桃》	46
金山平三《樹》	16	遠山五郎《夫人像》	48
後藤工志《柿日和》	18	西脇順三郎《静物》	50
三宅克己《湯ヶ島》	20	御厨純一《風景》	52
小山周次《井之頭池》	22	原 勝郎《森の中の母子》	54
青木 繁《桜》	24	川上涼花《風景》	56
河久保正名《林金兵衛肖像》	26	広幡 憲《浮標》	58
松原三五郎《富士遠望図》	28	吉岡 憲《煮もの》	60
三迫星洲《花を摘む朝鮮の少女》	30	阿部金剛《郷愁》	62
都鳥英喜《ベニス サンマリヤ寺》	32	普門 暁《アンナ・パヴロヴァ(瀕死の白鳥印象)》	64
永地秀太《静物》	34	澤部清五郎《座せるシュザンヌ》	66
		土方久功《孤島》	68

内田 巖《風景》  
 加賀孝一郎《伊良湖の海》  
 草光信成《西の空》  
 水野 朝《ゆうちゃん》  
 鞍掛徳磨《老母》  
 森田信夫《アムール河の初雪》  
 森清治郎《サンクトールの眺め(セーヌ河)》  
 中村研一《風景》  
 安井曾太郎《花と太陽》  
 渡辺 学《海女笑う》  
 朝倉 撰《静物》  
 原 勝郎《パリの郊外》  
 菅 創吉《ハルピンの追憶》  
 オチ・オサム《フォンタナに捧ぐ》  
 山下 清《ちぎり絵「富士さん」》  
 斎藤与里《知多早春》  
 松永敏太郎《藤椅子で読書する女》  
 此木三紅大《習作裸婦》  
 野見山暁治《ほぼづえ》

258 256 254 252 250 248 246 244 242 240 238 236 234 232 230 228 226 224 222

木村忠太《初夏B》  
 上野山清貢《鮭》  
 大沢昌助《自画像》  
 大沢昌助《風景》  
 古茂田守介《座る女》  
 正木 隆《From DRIVING to DIVING 03-4》  
 恩地孝四郎《童女浴後》  
 山本 弘《水神》  
 山田彊一《婆羅門シリーズNo.7 アジャント No.1》  
 山田彊一《現代餓鬼童子シリーズ 太郎と花子 (No.11)》  
 菅野圭介《蔵王雪山》  
 中村忠二《アオイテガミ》  
 中村忠二《ははごぐさ》  
 中村正義《おとこ》  
 小山田二郎《幻の鳩》  
 井上長三郎《猫》  
 早川義孝《漁村の白い夜》  
 木村忠太《木陰》  
 高木義夫《早春》

296 294 292 290 288 286 284 282 280 278 276 274 272 270 268 266 264 262 260

須田 寿《群牛》  
 大久保作次郎《江の島待春》  
 鶴田吾郎《層雲峡》  
 大貫松三《柿と栗》  
 桜井浜江《花瓶》  
 森 芳雄《母子像》  
 寺田政明《むくげ》  
 今井ロヂン《バラと花瓶》  
 荻須高德《赤いひさしのある家》  
 児玉幸雄《モンマルトル》  
 三岸節子《花》  
 三岸好太郎《道化》  
 長谷川利行《大八車のある風景》  
 此木三男《僕のアトリエ》  
 山口長男《趨》  
 長谷川湊二郎《茶器》  
 清宮質文《むかしのはなし》  
 野口謙蔵《風景》  
 南城一夫《猫》

182 180 178 176 174 172 170 168 166 164 162 160 158 156 154 152 150 148 146

曾宮一念《富士と愛鷹》  
 荒井龍男《ボードレールの碑》  
 北岡文雄《漁夫と烏と白い船》  
 鬚嘔《レインボー北斎》  
 津高和一《作品》  
 安藤信哉《静物》  
 瑛九《(仮)花束》  
 荒井龍男《静寂》  
 野口彌太郎《セビラの行列》  
 古茂田守介《小児像》  
 坂本善三《秋果》  
 福井良之助《作品》  
 寺田政明《河口沿いの風景》  
 オノサト・トシノブ《作品》  
 相吉沢久《秋の訪れ》  
 菅野圭介《秋》  
 仲田菊代《帽子の女》  
 野田哲也《日記1976年8月19日》  
 村上肥出夫《パリの街角》

220 218 216 214 212 210 208 206 204 202 200 198 196 194 192 190 188 186 184

増田 誠 《チェスするキング》	298	變嘔 《ハート》	336
二見彰一 《バルトークの部屋》	300	菅野 功 《静物》	338
村井正誠 《雨の中の少年》	302	タカハシ・ノブオ 《人形》	340
大沢昌助 《森にいく道》	304	松村光秀 《黙唄》	342
篠田桃紅 《Sprout》	306	西村宣造 《阿吽》	344
嶋田しづ 《刻みゆく時の流れ》	308	松田正平 《自画像》	346
大澤 寛 《浜辺》	310	小石サダヲ 《鎮魂》	348
岩崎勝平 《橋（大阪）》	312	松村光秀 《蝶とほうづき》	350
脇田 和 《ペーパーパレットと筆》	314		
清宮質文 《水辺の窓》	316	編集後記	堀 良慶
野田哲也 《日記1972年10月25日》	318	NPO法人あーと・わの会のご案内	堀 良慶
堀井英男 《magic room 83-1》	320	Information on NPO Art Wa-no-kai Association	
加賀美勲 《卓上の静物》	322	Foreword	Nohara Hiroshi
宮崎 進 《花と女》	324	For the publication of the art book <i>Wa-no-kai no me II (Eyes of the Wa-no-kai Association II)</i>	Hijikata Meiji
三尾公三 《蒼天へ》	326		
麻田 浩 《窓・鏡》	328		
星 襄一 《ブランコ星座26番》	330	作家索引	
加藤 正 《虹から生まれた卵》	332	所蔵家・執筆者一覧	
瑛九 《愛情》	334		

## 『わの会の眼Ⅱ』刊行に寄せて

土方明司

一昨年(二〇一五年)平塚市美術館で「わの会」メンバーのコレクション展が開催された。展覧会のサブタイトルは「サラリーマンコレクターの知られざる名品」。「わの会」は会社員をはじめ、公務員、医師など様々な職種による美術品コレクターの親睦団体である。そのコレクションは決して派手なものではないが、どれも隠れた名品であり、いぶし銀の魅力を放つ。実際、会場に展示された一四六点の作品は、それぞれの画家、彫刻家の個性と魅力を十全に伝え、小品でありながらも忘れがたい印象を残した。これほどの優品がそろうのも、コレクターひとりひとりが、美術作品に情熱と愛情を傾け、手間暇惜まず作品を見て回り、情報を集めているからであろう。

もともと時の権力者が蒐集するものであった美術作品が、個人のものとなったのは主に近代以降である。日本では、財閥系の資産家のコレクターが知られている。彼らは潤沢な資金を元手に、贅沢なコレクションを形成した。このコレクションは現在、日本の代表的な私立美術館として公開されている。主なものを列挙してみると、原善三郎・三溪の三溪園、大倉喜八郎の大倉集古館、根津嘉一郎の根津美術館、岩崎彌之助・小彌太の静嘉堂文庫美術館、大原孫三郎の大原美術館、石橋正二郎のブリヂストン美術館、五

島慶太の五島美術館、出光佐三の出光美術館等々。現代美術では銀行家の原六郎の原美術館などが知られている。また、瀬戸内海に浮かぶ小さな島、直島を世界的に有名なアートの拠点にした福武總一郎もいる。以上の美術館は国内外にも知られ、へたな地方公立美術館にはかなわぬ豊富なコレクションを収蔵する。その一方で、少ない資金ながらも優れた眼と直感によってこつこつコレクションを集め、注目すべきコレクションを残したコレクターもいた。画商でもある洲之内徹や、梅野隆などは、そのような慧眼の士として代表的存在であろう。この二人には私も個人的にお世話になった。机上の学問では学べない、自分の眼だけを頼りにした、美術作品との真剣勝負のようなものを教わった。

洲之内徹はいまでは伝説的な存在となった現代画廊を経営し、無名で有望な画家たちを応援した。ここでの展覧会をきっかけに世に出た画家も多い。名文家でも知られ、「気まぐれ美術館」シリーズは美術ファン必読の書となっている。「売らない画商」との異名で知られ、気に入った大切な作品は手元に置いた。現在その作品は「洲之内コレクション」として宮城県美術館で常設され、全国から熱心なファンが訪れている。

元サラリーマンコレクターであった梅野隆は、定年後、東京・京橋で美術研究所藝林を経営した。父親は青木繁の友人で遺作の大半を所持していた梅野満雄。藝林時代の梅野は損得抜きで世に埋もれた画家たちを発掘し、その価値を世に問うた。今西中通、伊藤久三郎、菅野圭介、吉田卓ら、当時の美術界であまり話題にのぼらなかった、実力派の画家たちの再評価は梅野の存在抜きには語れない。長野県東御市にある梅野記念絵画

館はそのコレクションを展示している。

洲之内コレクション、梅野コレクションを見てまず感じることは、二人の美術作品にかける強い情熱と愛情である。両コレクションとも、前述した大コレクションに比べると実にささやかな規模である。しかしながら、その一点一点は地味ながらもジンワリと心に響く。美術があくまでも精神的な営みであることを実感する。両コレクションを訪ねる度に、何か大切な原点を確認する。

「わの会」は、この洲之内、梅野両氏の薫陶、影響を受けたメンバーが多い。両氏の美術に対する精神、姿勢がそのまま、この会の雰囲気を形成している。このことは、今回第二巻が刊行されるこの本を一読されればお分りいただけるだろう。ここには大コレクターが持つ巨匠作品は見当たらない。人気画家の売り絵もない。すべて画家が丹精込めた珠玉の作品ばかりである。また自慢の愛蔵作品に寄せた各コレクターのコメントも、評論家、学芸員では書けぬ性格のものだ。そこには、作品への慈しみが溢れている。

刊行が待たれたこの書によって、美術を愛する庶民コレクターの輪が広がることを願う次第である。

『わの会の眼 コレクターたちの静かな情熱』は二〇一二年六月にNPO法人あーと・わの会の一〇周年記念事業の一つとして発刊されたものです。その続編として本書『わの会の眼Ⅱ 心を射抜く作品たち』が上梓されました。小コレクターの集まりでありますNPO法人あーと・わの会の前身は「コレクターが創る！わたくし美術館」です。物故の洋画作家の作品を主にコレクションしている七三名の会員で組織されています。作品の公開や埋もれた作家の発掘顕彰をして美術普及活動の推進をはかっています。本書掲載の作品をご覧いただければご理解いただけるように高名高額なものはありませんが、珠玉の名品が数多くあります。全国の会員が長年苦勞してコレクションしたものです。作品は一七〇点、作家数一四五名、制作年の幅は一八八一年から二〇一四年までの一三三年間に制作されたもので、油彩が主ですが水彩・版画・日本画・立体作品等で構成されています。二〇一五、六年には、平塚市美術館と東御市梅野記念絵画館で前著掲載作品のほぼ全作品を展示していた大きき好評を得ました。小コレクターのコレクションが一括して公立美術館二館で企画展扱いで本格的に展示されたことは大変稀なことでコレクター冥利に尽きます。いつも見慣れている作品が本格的な照明技術により一段と輝きを増し、我が子の晴れ舞台を見ているような感激を得ました。この本の掲載作品も機会に恵まれれば是非晴れの舞台に立たせてあげたいと思っています。あなたの好きな一枚の絵を探してみてください。きつと見つかります。そして楽しいひと時をお過ごしください。私たちの仲間としていつでも歓迎します。

(のほら・ひろし／NPO法人あーと・わの会理事長)

## 編集長挨拶

平園 賢一

二〇一五年二月から二〇一六年三月にかけて平塚市美術館と東御市梅野記念絵画館の二館で「わの会」展が開催されました。公立美術館では全国初となる庶民コレクター団体（NPO法人）のコレクション展です。美術館とコレクターの共同開催という実験的な試みでしたが大成功で終える事ができ、日本の芸術啓蒙運動の新たな形として世に問うことが出来たと確信しています。これもひとえに関係者の皆様のご協力とご理解の賜物であり、今さらながら感謝の念に堪えません。本当にありがとうございました。

さて、この度『わの会の眼Ⅱ』が刊行される運びになりました。前回にも増して多くのメンバーが出品し、質・量ともに素晴らしい内容となっています。芸術は日常生活の中にあつてこそ本領を発揮します。作品に込められたコレクターのやむにやまれぬ思いは、きつと読者の皆さまにも通じる事でしょう。

「蒐集亦芸術」そして「感動は新たなる美を発見する」

本書が後世のコレクターの良き道標になる事を期待しつつ。

絵のある待合室にて

(ひらその・けんいち／書籍プロジェクト・リーダー)